

## 情報活用能力の抜本的向上等について

令和7年5月12日

戸田市教育委員会教育長 戸ヶ崎 勤

○ 小学校での情報活用能力の育成に当たっての大きな課題として、教科等に明確な位置付けがなく、一人ひとりの教師が情報活用能力育成の視点を持って指導しにくいことが挙げられる。これまで、情報活用能力は、特定の教科で育成するのではなく、あらゆる教科等において指導されるべきものとあるだけに、それゆえ指導の焦点化・重点化が弱くなるという悩ましい課題であり続けてきた。

○ こうした中、総合的な学習の時間など、教科等横断的な探究が求められる学びの場においては、どの教科の見方・考え方や方略などが有効なのかがあらかじめ見えていない実態がある。だからこそ、子供たちは身に付けてきた情報活用能力の「道具」の数々を自覚し、整理して俯瞰的に眺め、どれがどんな理由でどの問題状況に適合するのかを考え、試行接近し、その有効性や留意点を深く実感するという、探究の大切なプロセスを辿ることになる。

その「道具」とは、情報技術を用いた、情報収集、情報整理、情報分析、分析結果の解釈、解釈の表現の力などだが、こうした情報活用能力は、探究のプロセスの基盤であり、こうした学びの中で一体的かつ重点的に育成することが重要である。そして、こうした言わば情報技術を積極的に活用する力が本来の効果を発揮できるよう、ときに二律背反の関係にもなりうる情報モラルやメディア（情報）リテラシー、また逆に、情報活用能力を力強く効果的に発揮する背景ともなりうる生成AIや最新のテクノロジーなどの特性についても密接に関連するものとして、発達段階を踏まえた形で、一体的かつ重点的に育成が必要となるものとする。

また、情報工学や経営工学等では有名な「DIKWモデル」（最近では、それにinsight（洞察）を加えた「DIKIWモデル」もある）の中で話題になるように、生成AIの普及により、「情報活用能力」は情報を超え、「知識活用能力」へと進化するのではないかという指摘もある。将来的には、AIを活用し学びを深化させる能力といった新たな能力も必要になってくるかもしれない。

○ そうした背景から、今後は、小学校では、こうしたことを踏まえ、情報活用能力をいわゆる「鋭角的に」学び、深める新たな枠組みを創設すべきであり、その中で情報活用能力を整理・統合し、汎用的な能力へと高め、各教科等でも生かされるというサイクルを循環させ、各学校の教育課程の中で豊かなハーモニーを奏でられるよう、カリキュラム・マネジメントをすることが必要ではないか。

- さらに、小学校の新たな枠組みの上に、中学校では、より発展的に情報技術を理解・活用して問題発見・解決する力を育成していく必要がある。加えて、高等学校では、小・中学校で新たに整理した内容の系統性を踏まえ、情報科の内容を更に充実するとともに、数理・データサイエンス・生成AIの活用等の学習も求められるのではないか。

その際、中学校では、技術・家庭科の技術分野の充実も位置付けられる必要がある。D領域（情報の技術）の充実はもちろん、他の3領域（A：材料と加工、B：生物育成、C：エネルギー変換）においてもデジタル技術との関連を図る中で、技術科トータルで、実生活・実社会などを意識した探究にも繋がるものにするのが重要である。この点、小学校とは異なり、総合的な学習の時間とは別途の教科として情報の受け皿が存在するからこそ留意が必要である。高等学校の情報Ⅰも内容の検討が必要になろう。

- また、今回の事務局案のような情報活用能力の課題（p. 24）を踏まえれば、情報活用能力の内容も今後整理が進むと思うが、これに伴い、「学習の基盤となる資質・能力」の考え方も何らかの方向性で整理が必要になるのではないか。
- その条件整備については、事務局資料（p. 25）でも動画教材など、基盤的なものについて提案がなされているが、それに加えて、教師が指導を抱え込まないよう、デジタル技術に関する専門性を有する、保護者を含む地域人材、企業等との積極的な連携について、各教育委員会等で検討を深めるべきである。特にこうした分野では、「社会に開かれた教育課程」に止まらず「社会と共にある教育課程」にも深化充実していくことを期待してやまない。